漢詩鑑賞入門

漢詩鑑賞入門

琉璃鍾
琥珀濃
小槽酒滴真珠紅
烹竜炮鳳玉脂泣
羅屏繡幕囲香風
吹竜笛

創元社

漢詩鑑賞入門

漢詩鑑賞入門代表著者高木正一発行者大阪市北区樋上町四十五番地矢部良策印刷者大阪市浪速区元町五丁目五百六十三番地伊藤印刷株式会社伊藤佐久馬発行所大阪市北区樋上町四十五番地株式会社創元社東京営業所東京都新宿区神楽坂六丁目七十三番地昭和三十七年六月三十日初版発行定価三百八十円

©1962　落丁・乱丁はおとりかえいたします

目　次

第一部　中国詩の歴史とその形式

中国詩史梗概……四

中国詩の形式……二〇

第二部　中　国　編

先秦時代

関雎（詩経）……二八

○桃夭（詩経）……三〇

漢

垓下の歌（項籍）……三二

大風の歌（劉邦）……三三

戦城南（古楽府）……三四

後

五噫歌（梁鴻）……三七

古詩（古詩十九首）……三八

魏

短歌行（曹操）……四〇

雑詩（曹植）……四七

七哀詩（王粲）……四四

百一詩（応璩）……四九

詠懐詩（阮籍）……五三
晉
王明君の辞（石崇）……五五
悼亡詩（潘岳）……五九
東晉
遊仙詩（郭璞）……六八
飲酒（陶淵明）……七一
宋
秋胡行（顔延之）……七四
池上楼に登る（謝霊運）……七七
斉
暫く下都に使いし夜に新林を発して京邑に至り、西府の同僚に贈る（謝朓）……八三
梁
湖中の雁を詠ず（沈約）……八六
相送る（何遜）……八八
陳
毛永嘉に別る（徐陵）……九三
猛虎行（陸機）……六二
招隠詩（左思）……六六
子夜歌（晉代呉歌）……七三
東門行（鮑照）……八〇
建興苑に送別せしとき相逢う（庾肩吾）……八九
河中の水の歌（梁代楽府）……九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

北　周
詠懐（庾信）……九五
河北に渡る（王褒）……九九
隋
南に還りて草市の宅を尋ぬ（江総）……一〇三
唐
述懐（魏徵）……一〇六
滕王閣（王勃）……一一
白頭を悲しむ翁に代わる（劉希夷）……一一三
幽州台に登る歌（陳子昂）……一一七
涼州詞（王翰）……一一八
春晩（孟浩然）……一一九
洞庭に臨む（孟浩然）……一二
鶴鵲楼に登る（王之渙）……一二三
涼州詞（王之渙）……一二三
芙蓉楼にて辛漸を送る（王昌齢）……一二四
出塞（王昌齢）……一二六
西宮の春怨（王昌齢）……一二七
敕勒の歌（北方楽府）……一〇一
人日帰るを思う（薛道衡）……一〇五
長信秋詞（王昌齢）……一二八
九月九日山東の兄弟を憶う（王維）……一二九
元二の安西に使いするを送る（王維）……一三一
鹿柴（王維）……一三二
竹里館（王維）……一三三
子夜呉歌（李白）……一三三
城南に戦う（李白）……一三七
月下の独酌（李白）……一四〇
山中にて幽人と対酌す（李白）……一四一
早く白帝城を発す（李白）……一四二
秋浦の歌（李白）……一四三
静夜思（李白）……一四四

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）一四四
宣州の謝朓楼にて校書叔雲に餞別す（李白）…一四五
友人を送る（李白）……一四七
董大に別る（高適）……一四八
除夜の作（高適）……一四九
清夷軍に使いして居庸に入る（高適）……一五〇
黄鶴楼（崔顥）……一五一
穆陵関の北にて人の漁陽に帰るに逢う
（劉長卿）……一五三
兵車行（杜甫）……一五五
春望（杜甫）……一六二
羌村（杜甫）……一六三
九日藍田の崔氏の荘（杜甫）……一六五
春夜雨を喜ぶ（杜甫）……一六七
茅屋の秋風の為に破られし歌（杜甫）……一六九
絶句（杜甫）……一七二
登高（杜甫）……一七三
秋興（杜甫）……一七四
岳陽楼に登る（杜甫）……一七六
磧中の作（岑参）……一七八
胡笳の歌、顔真卿の使いして河隴に赴くを
送る（岑参）……一七九
帰雁（錢起）……一八一
楓橋夜泊（張継）……一八三
秋日（耿湋）……一八四
雁を聞く（韋応物）……一八五
秋思（張籍）……一八六
左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す（韓愈）一八七
新豊の折臂翁辺功を戒むる也（白居易）……一八九
八月十五日の夜、禁中に独り直し、月に対
して元九を憶う（白居易）……一九七
香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて
成りしとき、偶たま東壁に題す（白居易）…一九九
江雪（柳宗元）……二〇〇
白楽天の江州の司馬に左降せらるるを聞く
（元稹）……二〇一

感飄（李賀）……二〇三
将進酒（李賀）……二〇五
山行（杜牧）……二〇七
江南の春（杜牧）……二〇八
秦淮に泊す（杜牧）……二〇九
烏江亭に題す（杜牧）……二一〇

宋

魯山の山行（梅堯臣）……二一〇
夏意（蘇舜欽）……二一二
遠山（欧陽脩）……二一三
豊楽亭遊春（欧陽脩）……二一四
虞美人草（曾鞏）……二一五
鍾山即事（王安石）……二一九
梅の花（王安石）……二二〇
夜の直（王安石）……二二一
春の夜（蘇軾）……二二二
望湖楼醉書（蘇軾）……二二三
酒を勧む（于武陵）……二二二
錦瑟（李商隠）……二二三
無題（李商隠）……二二六
夜雨北に寄す（李商隠）……二二八
己亥の歳（曹松）……二二九
十二月二十八日、恩を蒙りて検校水部員外郎黄州団練副使を責授さる（蘇軾）……二二四
飲酒（蘇軾）……二二六
竹石牧牛の図に題す（黄庭堅）……二二七
児に示す（陸游）……二二九
憤りを書す（陸游）……二四〇
冬初の出遊（陸游）……二四一
晩春田園の雑興（范成大）……二四二
零丁洋を過ぐ（文天祥）……二四四

金

山居雑詩（元好問）……二四九
元
上京即事（薩都剌）……二四八
明
胡隠君を尋ぬ（高啓）……二五〇
山中の春暁、鳥声を聴く（高啓）……二五一
水上手を盥ぐ（高啓）……二五二
夏日夜泊して、友人に別る（李夢陽）……二五三
清
秦淮なる丁家の水閣に留題す（銭謙益）……二五九
口占（呉偉業）……二六一
梅村（呉偉業）……二六二
南湖にて夜歌者を聞く（朱彝尊）……二六三
雨後の即事（朱彝尊）……二六四
青山（王士禎）……二六六

第三部　日　本　編

九月九日（菅原道真）……二七六
事に感ず（元好問）……二四七
雪中、簡上人の房に飲む（薩都剌）……二四九
独り立ちて（何景明）……二五四
暑を山園に避く（王世貞）……二五五
太白楼に登る（王世貞）……二五六
横塘の渡し（袁宏道）……二五七
真州雑詩（王士禎）……二六七
老境（沈徳潜）……二六八
銷夏詩（袁枚）……二七〇
茶亭（袁枚）……二七一
夜に起きて（黄遵憲）……二七二
海南行（細川頼之）……二七八

九月十三夜（上杉謙信）……二七九
感有り（山崎闇斎）……二八〇
自ら肖像に題す（新井白石）……二八一
冬の夜の読書（菅茶山）……二八三
楠公子に訣るる図に題す（頼山陽）……二八四
不識庵の機山を撃つ図に題す（頼山陽）……二八五
本能寺（頼山陽）……二八七
天草洋に泊る（頼山陽）……二八九
桂林荘雑詠（広瀬淡窓）……二九〇
四十七士（大塩中斎）……二九一
常磐孤を抱くの図（梁川星巌）……二九二
訣別（梅田雲浜）……二九四
舟由良港に至る（吉村寅太郎）……二九五
芳野に遊ぶ（藤井竹外）……二九六
芳野（河野鉄兜）……二九八
児島高徳の桜樹に白する図に題す
（斎藤監物）……二九九
児を棄つる行（雲井竜雄）……三〇一
偶成（西郷隆盛）……三〇三
金州城下の作（乃木希典）……三〇五
あとがき……三〇七

漢詩鑑賞入門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一部　中国詩の歴史とその形式

中国詩史梗概

中国の文学の歴史は詩からはじまり、詩の歴史は「詩経」からはじまる。

「詩経」は紀元前十一世紀ごろから紀元前六世紀ごろまでの民間歌謡およびその伝承のうちに周王朝や諸侯の祭政と関係づけられた歌詞からなっている。もともとは、舞踊や音楽をともないつつ、それぞれの地域・時代の共通文化財として享受されたものだが、紀元前五世紀のころ、宮廷史官によってであろう、編纂され古典化された。内容は、恋愛・田猟・行旅・政治・祭祀など多岐にわたりつつ、共同体共通の哀歓を素朴にうたう。形式は一句四言を基準とし、脚韻をふみ、また節と節とはおおく〈畳詠〉の構成をとる。それは、もっぱら聴覚的享受にたよった古代的コミュニケイションに対応する自然な技術であっただろう。

こうした民歌は「詩経」編纂後も各地で自然発生的に作られつづけたにちがいないが、興亡たえまない戦国時代（紀元前四〇二～二二一）には、のちに歴史書にたまたま引用された少数の断片以外、まとまって伝えられることはなかった。北方における詩の歴史は、それゆえ「詩経」編纂ののち漢代まで、数世紀間の空白が生ずるのである。

その断絶をうめるのは、紀元前三世紀ごろに南方にあらわれる、より華麗な「楚辞」の文学である。とりわけ、楚の国の貴族、屈原の「離騒」は南方歌謡の伝統のうえにたち、その可能性を最大

限に開花させた最初の知識人の文学として大きな意味をもつ。「離騒」は宮廷の政治闘争にやぶれた屈原が、自己の全人間性を詩によって回復しようとしたものであって、その態度が期せずして一種のロマン主義を形成しており、毎句七言の句づくり、隔句の末尾ないしは毎句のうちに、語気詞〈兮〉をおく特異な形式とともに、後世にその模擬・追従者を多くだした。

楚辞の伝統は、紀元前二世紀のころの項羽の「垓下の歌」や漢の高祖劉邦の「大風の歌」などにも継承されているが、しかし大勢としては事物の美的描写の文である〈漢賦〉へと展開する。賦もまた韻文ではあるが、縦の記録である歴史とならんで、横のひろがりの記録を志向したために、その抒情性は希薄になる。詩としては、武帝のころに置かれた民歌採集の官署である〈楽府〉そしてのちにはそこに採録された作品の総称ともなった〈楽府〉がいきいきした感情をつたえてくる。

二世紀、後漢の時代、詩が音楽と分離し、固有の文学性をもって大きく登場するとき、形式は五言に発達していた。その代表的なものが、「古詩十九首」として知られる読み人知らずの詩編である。それらは、多く世の離合集散を嘆き、孤独な旅人や棄てられた女の悲しみを、濃厚な無常感のうちにうたう。一方、また楽府は、民間に伝承される逸話にもとづいた長編の物語詩へと発展するが、「陌上桑」や「孔雀東南飛」など、もっぱら女性の側に身をおいてうたう点は共通している。楽府・古詩ともに要するに、経典化されなかったそれぞれの時代の〈詩経〉であると考えてよい。

漢末から魏の時代、三世紀には、そうした民歌に滋養をとりつつ、強く、個人の思想と士大夫の感情をおりこんだ読書人の文学が台頭する。曹操・曹丕・曹植の父子および彼らを中心にあつまっ

た建安の七子がその代表であって、男性的な友情と慷慨が、詩の主導的な素材となり要素となった。さらに魏晉の王朝交替期の苛酷な時代に生きた阮籍・嵇康ら竹林の賢人たちは、その上にふかい形而上学的思弁性をあたえ、詩を知識人の真摯な心情告白の具として完成させた。詩の文学の第一芸術としての完成は、不安定な社会のなかでの、人間個性の発見とその尊重とにふかい関係をもっている。

三世紀の末葉、晉代にはいると、急速に修辞主義的な傾向が顕著になる。詩は民歌のもつ通俗性を濾過して、修辞はあくまでも典雅に、そしていかなる感情も美化してうたおうとする態度が優勢になる。それは、貴族制社会の成立と貴族的な文学サロンの誕生に対応するものである。陸機の形而上学的志向、潘岳の感傷主義、左思の写実主義など、二、三の傾向が並存しつつ、文学の大勢は非政治化のみちを歩んでゆく。この傾向はながく唐初までつづき、文学を芸術として洗練する一方、またその遊戯化をもうながすのである。

文学作品から政治的価値を排除する動きは、まず、従来、政治を支える指導理念であった儒家思想からの脱却、そして哲学的にその対極に位置する老荘思想への依拠となってあらわれる。もっとも端的な事例は、漢民族の支配が江南にかぎられた東晉の時代の文学、孫楚・許詢らの〈玄言詩〉であり、郭璞の「遊仙詩」もその一翼を形成するものである。傾向としては注目すべき、このメタフィジカル・ポエットリの流行は、しかしあまり傑作はうまなかった。傑作は、江南の地の風光の美しさもあいまって、観念としての自然ではなく、自然そのもののうちに〈真意〉をみようとする

自然詩の盛行のうちにあらわれる。晉の陶淵明の、生活とむすびついた自然、宋の謝霊運の自然の中での自我の発見がそれである。あるいは田園が、あるいは山水が、自我解放の場として声高くうたわれる。政治社会への絶望が、詩人たちをして自然へとかりたてたのである。当時「子夜歌」に代表される民歌が庶民のあいだに流行していたが、五言四句からなるその小詩は、ひたすらに男女間の哀楽をうたい、先秦、漢代における民歌がもっていた諷諫性はもはやもたない。

五、六世紀、斉梁の時代になると、詩人たちの態度は政治悪への反抗ではなく、政治への無関心に転化し、自然詩も、また、自然を通じて〈志を言う〉慷慨性もうしなう。作品は一般に小品化し、花鳥風月の繊細な観察が、謝朓らの〈詠物詩〉をうむ。また、斉の竟陵王・子良や梁の昭明太子のサロンにつどった文人たちは、精巧な対句、荘重な典故の技法にその才能をきそいあう。視野はせばまったけれども、女性の美や庭園美など、平和な日常のうちに美をみいだしたことは、やはり表現史上のひとつの発展であろう。また、梁の沈約らが、インド音韻学の影響下に中国語がもつ抑揚を四つに区分して体系づけ、それを平仄にまとめて詩学に適用しようとこころみる。その完全な適用は、初唐における律詩の登場をまたねばならないが、この試みによって、中国の定型詩は、音節の一定性、押韻、対句、典故の技術とともに、リズムの法則にも開眼するのである。

六世紀、南朝末、南北の対峙した政治の紛争は、庾信をはじめ多くの亡国の詩人をうんだ。その混乱は、詩人たちにとっては不運であったが、文学にとっては、その形式の華麗さのかげに久しく失われつつあった人間的心情を復活させる契機となった。さらに、交流のたえていた優美な南方と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton